

寄 書

1670年西蒲原地震の被災地 「四万石」について

新潟県立巻総合高等学校*

河内 一男

Consideration on the Territory of "Shimangoku,"
the Quake-hit Area of the 1670
Nishi-Kanbara Earthquake

Kazuo KAWAUCHI

Maki Sogo High School, 4295-1 Maki-kou,
Nishikan-ku, Niigata 953-0041, Japan

§1. はじめに

平成19年7月16日に、新潟県柏崎平野沖合を震源としてM6.8の地震(新潟県中越沖地震)が発生した。日本海東縁南部地域では、4カ月前に能登半島地震(M6.9)が、3年前には新潟県中越地震(M6.8)が発生しており、そのためもあって、この地域の地震テクトニクスに対する関心がにわかを高まっている。

テクトニクスの追究には地震活動履歴の検討が不可欠である。寛文十年五月五日(1670年6月22日)に越後で発生した地震(M6.3/4)は、被災地名の解釈に混乱があったため、これまで地震像が明確でなかった。河内(1995)、河内・大木(1996)は、この地震を記述した村上藩史料中の「四万石」という語が石高から転じた地域名であることを示し、震源域を越後平野中央部の新潟市西区黒崎地区、南区味方地区、同月潟地区、西蒲区中之口地区、燕市などの中ノ口川流域地方に修正すべきだとした。また、これらの地域はいずれも旧西蒲原郡に相当するのでこの地震を西蒲原地震と名づけた。これに対し、宇佐美(2003)は『最新版・日本被害地震総覧』の巻末資料において「河内・大木の説を確かなものとするには①四万石領は公式名称か俗称か②名称が使われだしたのはいつかということを明らかにしてからでも遅くはない」として本文への記述を留保している。

本論では、新たに得た史料を加えて、宇佐美(2003)の指摘した疑問に答え、寛文十年の地震(西蒲原地震)の

震源域が越後平野中央部の中ノ口川流域であったことを確認したい。

§2. 『榊原家江戸屋敷日記』

この地震を記した『榊原家江戸屋敷日記』の条々は、

○五月十四日庚午 天陰是日從村上飛脚来去五日於村上大地震併御城中御家中町中無別狀上川四万石之内百姓家五百三軒禿人十三人馬二匹死田畠荒植田ユリ込也

○八月十日甲午 天陰是日五月五日村上大地震ニ付四万石之内家数五百三十三軒禿申彼之百姓共手前不能成候ニ付一軒ニ金子壹分充下之可然由申遣

の2カ所である。榊原家は政倫・政邦の二代の間、村上藩主であった。幼少の政倫が当主となった寛文七(1667)年に姫路から転入し、次の政邦の代の宝永元(1704)年に姫路に戻ったが、榊原家はその後越後高田に転出して幕末を迎えたので、この史料は上越市立高田図書館に収蔵されている。問題の地震は榊原家入封4年目の寛文十年五月五日(1670年6月22日)に発生した。この史料は『新収日本地震史料第二巻』[東京大学地震研究所(1982)]に採録されている。

宇佐美(1987)の『新編日本被害地震総覧』では、五月十四日の条の「上川」を福島県境に近い新潟県東蒲原郡上川村(現阿賀町上川地区、その後、宇佐美(1996)の『増補改訂版新編日本被害地震総覧』で阿賀野市(旧水原町、笹神村、安田町)および五泉市に修正)と考え、「四万石」はその石高とみなした。これに対し、河内(1995)、河内・大木(1996)は、「四万石」が越後平野中央部の中ノ口川西岸および三条市から旧寺泊町へかけての信濃川西岸地域を指す地方名であることを明らかにし、震央はそのうちの中ノ口川西岸地域であると論じた。

§3. 『新潟県史』

当時の村上藩は、藩主家が頻繁に入れ替わった。『新潟県史通史編3』[新潟県(1987a)]によれば、慶長三(1598)年に村上頼勝が高田藩主堀秀政の与力大名として入封した(このため「小泉の荘」と呼ばれていた当地は以後「村上」と呼ばれるようになる)が元和四(1618)年に改易され、その後入った秀政の同族の堀直寄も寛永十九(1642)年に無嗣断絶(分家の村松藩は幕末まで存続)となった。2年間出雲崎代官所預かりの後、正保元(1644)年に本多忠義、慶安二(1649)年に松平直矩、寛文七(1667)年に榊原政倫が入封した。

幕府は松平直矩を入封させる際、同家が15万石格であったので、本多氏の時に10万石だった村上領を11万石に「高直し」をし、さらに直轄領の三島郡・蒲原郡

*〒953-0041 新潟市西蒲区巻甲4295-1
現所属 新潟県立新津南高等学校

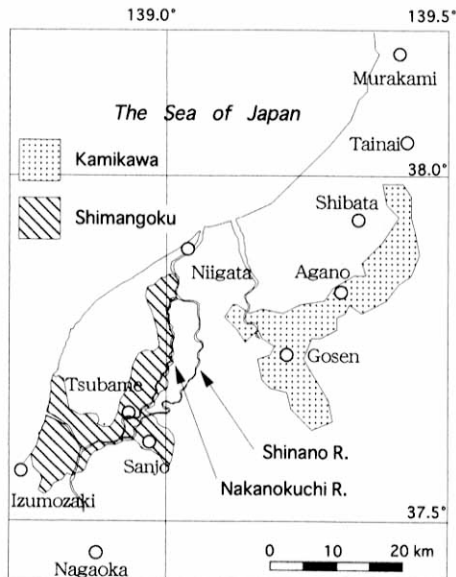


Fig. 1. The separate distribution of the old feudal domains of Kamikawa and Shimangoku.

の4万石分を新たに付け加えた。村上藩ではそれまでも村上城周辺の北部地方を下川、城から離れた南部地方を上川と呼んでいた。上川は現在の新発田市東部から阿賀野市さらに五泉市にかけての地帯である。慶安二年に付け加えられた4万石は松平家の家格15万石を充足するために「追加された石高」として話題となったものであろう。『新潟県史通史編3』では、以後上川・下川に並んで、「四万石」と呼称されるようになったと記している。なお、「四万石」を河内・大木(1996)では“Yonmangoku”と読んだが、その後「当時の読みは“Shimangoku”」という指摘があった。地名(厳密にいうとこの場合は地名ではなく領地名である)の読みは重要と考えられるので以後“Shimangoku”と変更する。

松平家の後に入った榊原家も15万石格であったからそのままその領地を受け継いだ。Fig. 1 [河内・大木(1996)の図を一部改変]に四万石と上川両地域の位置関係を示す。

§ 4. 新井白石の『折りたく柴の記』

『新潟県史通史編3』では地名「四万石」の出典が明記されておらず、それが宇佐美(2003)の指摘した疑問点であった。ところが、このほど新井白石の『折りたく柴の記』[岩波書店(1964)]中に、越後「四万石領」についての記述があることを見出した。白石は元禄六(1693)年から享保元(正徳六、1716)年まで徳川綱豊(はじめ甲府藩主のち六代将軍家宣)、徳川家継(七代将軍)に仕

えた。この任期中にたまたま当地で事件が発生したために「四万石」という文字が記録に残ることになった。事件とは、問題の地震の41年後の宝永八(1711)年に越後村上藩(当時、松平輝貞が藩主)で起きた百姓騒動である。岩波書店(1964)の『日本古典文学大系95』で見ると、この騒動に関する記述はpp. 280~286の7ページにわたっている。

まず、「奉行所より奉れる状」を引用した部分は、

去年松平右京太夫輝貞、村上之城を賜りし時、三島・蒲原等の郡四萬石領といふ所の百姓等、其地を以て御料になさるべき事を来り訴ふ、

であり、また四万石領のいわれを記した部分は、

六十年の前、松平大和守直基(注)村上之城を賜りし時、三島・蒲原等の郡にして四萬石の地を加らる。これよりして、土俗其の地を稱じて、四萬石領とはいひけり。(注:直矩(直基の子)の誤りと思われる)

となっている。「四萬石といふ所」あるいは「土俗其の地を稱じ」という表現から俗称であったことは明らかだが、奉行所から将軍(老中)への報告で使われているので、村上藩と幕府間の公式なやりとりで通用していた地域名であったともいえる。また「松平大和守が村上を賜りし時」から使われ始めたことも確認できる。

§ 5. 四万石の村々

『新潟県史通史編3(pp. 185本文および表42)』[新潟県(1987b)]によれば以下に示す10組を四万石領と称していたとされている。

- ①三条組, ②一ノ木戸組, ③燕組, ④地藏堂組,
- ⑤渡部組, ⑥寺泊組, ⑦打越組, ⑧釣寄組,
- ⑨茨曾根組, ⑩味方組

一方、『新潟県史資料編8』には『貞享元年榊原勝乗領分郷村高辻帳』[新潟県(1987c)]という史料があり、当時の村上藩支配の村々が確認できる。この史料の形式は次のようになっている。

一 高○石○斗○升○合 村名 (以下列挙)

組名の記載はないが、系統的に列挙(組ごとに分類)されており、新潟県(1987b)と照合すると各組に所属していた村々を特定することができる。Table 1は、四万石10組のうち河内・大木(1996)が震源域から除外した⑤渡部組と⑥寺泊組以外の8組分について、新潟県(1987b)の記載順に整理したものである。さらに、現在の地形図で特定できる村々の位置とそれに基づいた四万石の領域をFig. 2に示した。なお、平成の市町村合併により、かつて「西蒲原郡」であった町村の住所表記は、黒崎町→新潟市西区、味方村→同南区、月潟村→同南区、

Table 1. Villages which once belonged to the feudal domain of Shimangoku of the Murakami clan except Watabe-kumi and Teradomari-kumi.

新潟県(1987c)による組名	新潟県(1987b)にある村名	現在残る地名など	新潟県(1987c)による組名	新潟県(1987b)にある村名	現在残る地名など
一ノ木戸組	市之木戸村	一ノ木戸小学校	打越組	下尻木村	燕市下尻木
	荒町村	三条市荒町		上尻木村	燕市上尻木
	浦館村	三条市裏館		四ツ屋村	燕市四ツ屋
	鶴田村	三条市鶴田		中川村	燕市中川
	日光村	三条市新光町		小牧村	燕市小牧
	谷地村	不明		牧ヶ嶋村	旧中之口村牧ヶ嶋
	下須比村	三条市下須頃		釣寄村	旧月潟村釣寄
	加坪川村	三条市嘉坪川		三門新村	旧中之口村三門
	石上村	三条市石上		又新村	旧燕市又新
	入蔵村	三条市北入蔵		河間村	旧中之口村河間
三条組	栗林村	三条市栗林	釣寄組	福嶋村	旧中之口村福嶋
	上野原村	三条市上野原		道上村	旧中之口村道上
	西大崎	三条市西大崎		国見村	旧潟東村国見
	柳沢村	三条市柳沢		今井村	旧潟東村今井
	中村	三条市中新		茨嶋村	旧潟東村茨嶋
	東大崎	三条市東大崎		番屋村	旧潟東村番屋
	籠場村	三条市籠場		下大原村	旧潟東村大原
	牛ヶ嶋村	三条市牛ヶ嶋		井随村	旧潟東村井随
	三柳村	三条市三柳		木滑村	旧月潟村木滑
	三竹村	三条市三竹		長嶋村	旧月潟村長嶋
	田嶋村	三条市田島		大曾根村	旧潟東村大曾根
	坂井村	三条市下坂井		味方村	旧味方村味方
	四日町村	三条市四日町		小新村	新潟市西区小新
	中新村	三条市中新		亀貝村	新潟市西区亀貝
西潟村	三条市西潟	黒鳥村	旧黒崎町黒鳥		
燕組	燕町	燕市市街地	味方組	木場村	旧黒崎町木場
	八王子村	燕市八王子		板井村	旧黒崎町板井
	柚木村	燕市柚木		白根村	旧味方村白根
	蔵関村	燕市蔵関		茨曾根村	旧白根市茨曾根
	佐渡村	燕市佐渡		西萱場村	旧月潟村西萱場
	上須頃村	三条市上須頃		東萱場村	旧白根市東萱場
	小高村	燕市小高		月潟村	旧月潟村月潟
	関崎村	燕市関崎		大別当村	旧月潟村大別当
	大曲村	燕市大曲		針ヶ曾根村	旧中之口村針ヶ曾根
	井戸巻村	燕市井戸巻		六分村	旧中之口村六分
	灰方村	燕市灰方		長場村	旧中之口村長場
	山王淵村	燕市山王淵		中村	旧中之口村東中
	長渡村	燕市長渡		船越村	旧中之口村東船越
	太田村	燕市東太田		門田村	旧中之口村門田
小関村	燕市小関	高野宮村	旧中之口村高野宮		
打越組	打越村	旧中之口村打越	地藏堂組	小中川村	燕市小中川
	長所村	燕市長所		地藏堂町	旧分水町地藏堂
	館野村	燕市館野		杉柳村	燕市杉柳
	館野池村	不明(廢村?)		小池村	燕市小池
	姥嶋村	旧中之口村姥嶋		柳山村	燕市柳山
	羽黒村	旧中之口村羽黒		横田村	旧分水町横田
	真木村	旧中之口村真木		道金村	燕市道金
	大船渡村	燕市大船渡		笈ヶ島村	旧分水町笈ヶ島
	勘薪村	燕市勘薪		熊森村	旧分水町熊森
	小古津新村	燕市小古津新		砂子塚村	旧分水町砂子塚
	二階堂村	燕市二階堂		杉名村	燕市杉名



Fig. 2. The distribution of old villages (solid circles) compiled from Niigata-ken (1987b). Shaded part indicates the territory called "Shimangoku".

潟東村→同西蒲区、中之口村→同西蒲区、分水町→燕市と変更されている。

ところで、宇佐美(2003)の『最新版・日本被害地震総覧』(p. 575)の四万石の領域図は味方組付近の一部が欠落し、最北部が島状に描かれているが、実際には Fig. 2 のように信濃川の分流である中ノ口川の西岸に沿って四万石の領地が連続していた。北部の味方組の村数が少ないのは、当時この付近に湖沼(鎧潟、升潟、大潟、田潟など)が多く分布していたためである。

§ 6. まとめ

寛文十年に越後村上藩領で発生した地震(西蒲原地震)の被災地を示す「四万石」という古記録中の語は、「土俗の称」を村上藩の国許から江戸屋敷へ、さらに藩の江戸屋敷から幕府への報告で用いた特定の地域を指す名称である。これは村上藩が飛び地として4万石分を領有していた寛文七(1667)年頃から、少なくとも新井白石が『折りたく柴の記』を執筆する享保元(1716)年までは藩や幕府で使われていた。

この地震の震央は河内・大木(1996)の議論をもとに検討するのが妥当と考えられる。

謝 辞

この研究をまとめるにあたり、宇佐美龍夫先生には本研究の初期の段階から数々のご助言をいただききました。都司嘉宣氏、松浦律子氏による査読意見は本稿を改善する上で大変有益でした。これらの方々には深く感謝申し上げます。

文 献

岩波書店, 1964, 日本古典文学大系 95, pp. 280-286.
河内一男, 1995, 新潟県北部の地震の前震に伴った鳴動, 月刊地球, 17, 774-778.

河内一男・大木靖衛, 1996, 1670年西蒲原地震の震央の再検討, 地震 2, 49, 337-346.

新潟県 a, 1987, 新潟県史, 通史編 3, p. 180, p. 248.

新潟県 b, 1987, 新潟県史, 通史編 3, p. 185.

新潟県 c, 1987, 新潟県史, 資料編 8, pp. 120-137.

東京大学地震研究所(編), 1982, 新収日本地震史料, 第二巻, pp. 335-336.

宇佐美龍夫, 1987, 新編日本被害地震総覧, 東京大学出版会, p. 157.

宇佐美龍夫, 1996, 増補改訂版新編日本被害地震総覧, 東京大学出版会, p. 52.

宇佐美龍夫, 2003, 最新版新編日本被害地震総覧, 東京大学出版会, p. 60, p. 575.